

---

# あの人の後ろ姿

ウナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの人その後ろ姿

### 【Nコード】

N8046E

### 【作者名】

ウナ

### 【あらすじ】

怪盗キッドと出会った、女の子お話です。

## 第一話

月下の奇術師。

世の女性達をその容姿と気障な言葉で骨抜きにしている、言わずとも知れた、大怪盗。

彼の声に、その後ろ姿に、私は心を奪われた。

これは、恋なのだろうか？

あの日は、学校から帰ってきてクタクタに疲れていた私は、少し休むつもりでそのままベッドに横になった。

ほんの少しのつもりが、目が覚めたら既に部屋は真っ暗で、カーテンの空いた窓からは月明かりが差し込んでいた。

「うわあ」

月なんて見るの、すごく久しぶり。

親の仕事の都合で引越したばかりの私は、高校も転校したばかり。授業内容が大幅に違っている教科があつて、その補習授業を受ける毎日。

教えてくれる先生も大変だろうけど、教えてもらうこっちも大変だ。そんな毎日を送っているせいもあつて、最近は夜空を見上げる余裕すらなかった。

今日は満月なんだあ。

そう思った私は、ベランダに出ようと窓に手をかけた。

「あれ？」

よく見ると、どうやらベランダには誰かいるようで……。人影があつた。

ドロボウ？

もし泥棒だとしたら、これは親に知らせなくては……。

そう思ったけど、泥棒がベランダで動かずにいるのもおかしい話。

それにここは25階で、普通に考えたら泥棒が外からくるのもおか

しい。

屋上から降りてきたのかな？

よほど身軽な人じゃなきゃ、とてもできない芸当。

一体どんな人なんだろう？

そんな風に考えながら、好奇心に駆られてそつと窓を開けてみた。

恐々と顔をのぞかせた私に気付いたのか、人影が振り返る。

「こんばんは、お嬢さん」

逆光で顔は見えないけど、声は若い男性で、その響きは優しくかった。

その声に安心して、私も「こんばんは」と返した。

「失礼。お邪魔してしまいましたか？」

彼の表情は相変わらず見えないけど、その声が耳に心地よくて、私はこの人は悪い人ではないと思った。

「ううん」と首を振れば、彼は安心したように「それなら良かった」と呟いた。

「あなたはここで何をしてるの？」

「少々疲れたので、羽を休ませていたのです」

この時やっと、私は彼の格好と言葉に「ああ」と思い当たった。

「あなた、怪盗キッドね？」

「ええ。初めまして。自己紹介が遅れ、失礼しました」

彼はシルクハットにそつと手をかけ、優雅に一礼した。

その綺麗な所作に、私はつい見とれてしまった。

洗礼された物腰、彼は一体どういう人なのだろう？

「私はナツキ」

そう自分の名を告げる。

「ナツキ……。どういう字を書くのですか？」

「ナツは春夏の『夏』。キは希望の『希』よ」

なんとなく自分の掌に書きながら説明すると、彼は「綺麗な名前ですな」と言ってくれた。

そう、今まで何度となく言われた「綺麗な名前」。

なのに、彼がそう言うとなんだかすごく気恥ずかしくて、私は「あ

りがと」と言つて俯いた。

「さて、せっかくあなたとこうして出会えたのに、そろそろお暇しなくてはならないようです」

彼の言葉にハツと顔を上げる。

「下が騒がしくなつてきましたからね」

下を覗き込むまでもなく、ヘリコプターの音、こちらを照らす照明。そして一応下を見てみれば、たくさんのパトカー。

警察の人がスピーカー片手に怒鳴っている。

夜中よ？今。

寝てる人もたくさんいるだろうに、迷惑だなあ。

そんな事を考えて、もう一度彼に視線を戻した。

「それでは、また。月下の淡い光の元、お会いしましょう」

そう言いながら私の左手を取り、その甲にそつと口づけを残す怪盗。私は再び彼のその所作に目を奪われてしまった。

「あ、また会おうね！」

私に向けられた後ろ姿。

その背中にそう言葉を投げると、彼は振り返つて「会いにきます、夏希に」と言い残して去つて行った。

しばらくの間、マンションの間を漂つていく彼の後ろ姿をぼんやりと眺めていた。

その後ろ姿はなんだかとても……。

彼の姿が見えなくなつて、その姿を追つて行ったパトカーのサイレンもじきに聞こえなくなつた。

## 第二話

翌日。

昨日のことはもしかしたら夢だったのではないかしら？などと思いつながら、学校へ向かった。

途中、電車の中で隣に座ったおじさんが新聞を広げていたので横目で盗み見る。

あ、出てる出てる。

怪盗キッドの記事。

一面で大きく出てるよー。

私はドキドキしながら横目でその記事を盗み読みした。

学校に着き、席に着く。

鞆の中身を引き出しに移し変えていると、隣の席の白馬くんが声をかけてきた。

「おはようございます。夏希さん」

「あ、おはよう。白馬くん」

白馬くんは私より少し前にこの学校に来た転校生。

同じ転校生ということと、席が隣同士ということで、結構仲良くしてもらっている。

教科書忘れたら見せてくれるし、勉強が分からないと教えてくれるし。

すごく親切にしてくれる。

彼の場合、根がフェミニストだから誰にでも親切なんだけど。

「今日は忘れ物、ないですか？」

からかうように聞かれ、「アハハ・・・」と苦笑するしかない。

毎日のように何か忘れては、彼に世話をかけてしまっているから。

教科書を忘れれば嫌な顔せず見せてくれるし、筆箱を忘れれば筆記用具も貸してくれる。

こうして彼が世話を焼いてくれるから、その好意に甘えてついつい

忘れ物をしてしまうのかもしれない。

「おはよー、夏希ちゃん」

前の席の青子ちゃんが振り返る。

「あ、おはよー。青子ちゃん」

私の前の席の中森青子ちゃん。

彼女もとても親切な女の子で、私が学校に慣れるよう色々と骨を折ってくれる。

とても優しくてカワイイ女の子だ。

彼女のお父さんは怪盗キッド専門の刑事さんだと言うことで、昨日キッドにまんまと予告品を盗み出されてしまったため、彼女はキッドに対して怒っていた。

お父さん思いの優しい子なんだよね、青子ちゃんは。

「まったく！ほんつとに腹が立つたら」

そうご立腹している青子ちゃんの傍らでは、黒羽くんが新聞を広げて読んでいる。

「そう怒るなつて、青子」

「んもう！どうせ快斗はキッド贖戻だもんね」

ふーん。黒羽くんはキッド贖戻なんだ。

聞くともなしに、二人のやり取りを聞いていると、黒羽くんのからかいに我慢できなくなった青子ちゃんがとうとう切れてしまった。

「このバ快斗！！！！」

そして黒羽くんを思い切り突き飛ばす。

黒羽くんが青子ちゃんのお父さんをバカにした発言をしたせいだ。

「いつてーな！このアホ子！」

口を尖らせて抗議する黒羽くんだけど、そりゃあ青子ちゃんにしたつてお父さんの悪口言われたら怒るのは当然だ。

そんな二人を横目に、私は昨日のキッドとの夢のようなやり取りを思い出し、ちよつと頬を赤らめた。

熱い熱いと、下敷きでパタパタ仰ぐ。

「あれ？夏希ちゃん顔が赤いね、大丈夫？」

青子ちゃんが心配そうに覗き込む。

切り替えが早い青子ちゃん。

「あ、うん。大丈夫だよ」

「でも、熱でもありそうだよ？なんか目もウルウルしてるし・・・」  
「そっかな？」

そう言いながら、あれ？これはもしかして授業をサボる良い口実になるのでは？と思った私は、青子ちゃんに「あ、やっぱり熱っぽいかも。ちよつと保健室行ってくるね」と告げて教室を後にした。

「一人で大丈夫ですか？」

白馬くんがそう聞いてくれたけど、「大丈夫よ」と手を振っておいた。

だって、行き先は保健室じゃなくて屋上だもん。

屋上は『立入禁止』となっていたけど、鍵を開けてしまえば誰でも出られる。

私はもちろんそれを無視して屋上に出た。

抜けるような青空。

風が気持ちいい。

大きく伸びをして、屋上のコンクリートの上に寝転んだ。

あーあ。

こうしていると、なんか狭い教室で授業を受けてる自分がとても小さな存在に思えるよ。

今頃キッドはどうしているのかなあ。

昼間はさすがに空飛んでないよね？

夜の事に備えて寝てるのかな？

昨日の夜以来、私の頭の中はキッドのことばいばいだ。

きつと、あの声と後ろ姿に心を盗まれてしまったんだなあ。

盗まれた心は返ってくるのかな。

そんな事を考えていたら、いつの間にか眠ってしまった。

「おい、おい・・・。起きろよ、夏希」

体を揺さぶられて、重い瞼を開く。

「あ……う……」

喉がカラカラ。

なんか飲みたい。

「大丈夫か？」

「う……」

目を擦り体を起こすと、目の前には黒羽くんがいた。

「あ、黒羽くん。どうしたの？」

「どうしたの？じゃねーよ。保健室にもいないし、探しにきたんだぜ？」

「あ、そっか。ごめんね」

んんつと咳払いして謝る。

「具合は大丈夫なのか？」

やっぱりこの学校の人達は皆優しい。

仮病使ってサボった自分が申し訳ない。

青子ちゃんにしても白馬くんにしても、そして黒羽くんも、私が本当に具合が悪くて保健室に行ったと思って心配してくれている。

「ごめんね。大丈夫」

そう言つて、私は黒羽くんにペコンと頭を下げた。

「教室出た時もたいしたことなかったの。サボりの口実ができたと思つて……」

バツが悪かったけど、正直に告げた。

「そっか。なら良かった」

黒羽くんはそう言つと爽やかに笑つた。

あ、この人すごくいい顔してるな。

笑顔がすごくいいな。

黒羽くんの笑顔に、思わず見とれてしまった。

「私、なんか喉が渴いちゃった」

視線を無理矢理黒羽くんから剥がして、私は立ち上がった。

スカートをポンポンと払い、「下に行こっか？」と黒羽くんを促す。

「ちょっと待つて」

そう言つて彼は「1、2、3」と声をかけると、その手にポンとベツトボトルが現れた。

「すごい!!!」

「はい」

それを私に差し出してくる。

「え？もらつていいの？ありがとう!」

「ただの水だけだな」

「ううん。喉カラカラなの。ありがとう」

ありがたくお水を頂く。

喉の渴きが潤つて、私は再び腰を下ろした。

黒羽くんが座つたまま、立とうとしないから。

「それにしてもスゴイね!黒羽くんがマジックの天才とは聞いていたけど、目の前で見るとやっぱりスゴイよ!」

興奮気味の私に、彼はニコニコと笑っていた。

きっと皆にこうしてマジックを褒められているから、私が興奮しているのも珍しくないんだろうな。

でも、私はすごく感動したよ。

この感動が彼にちゃんと伝わっていない様子なのがもどかしいけど・・・。

お昼休みを告げるチャイムが鳴り、私と黒羽くんは教室に戻った。

「あ、夏希さん。具合はどうですか?」

早速白馬くんが聞いてくる。

「あ、心配してくれてありがとうだね。もうすっかり大丈夫だよ」

ニコツと笑つて元気アピールをすると、白馬くんは「それは良かった」と笑顔を返してくれた。

「夏希ちゃん、お弁当食べよう!」

青子ちゃんと紅子ちゃんに誘われ、一緒にお弁当を広げる。

その脇で、黒羽くんが相変わらず新聞を広げていた。

### 第三話

帰り道、私は青子ちゃんと一緒にになった。

「夏希ちゃん、学校にはだいぶ慣れた？」

そう気遣ってくれる青子ちゃん。

「うん。もうすっかり慣れたよ」

転校してきて早いものでもう1ヶ月。

勉強は青子ちゃんや白馬くんが教えてくれるし、クラスの雰囲気にも馴染めてきた。

まだ微妙に顔と名前が一致しないクラスメートもいるけど……。これからこれから。

「これも青子ちゃんのお陰だよ」

そう言つて「ありがとう」とお礼を言つと、青子ちゃんはちょっと頬を赤らめた。

「そんな……お礼なんていいよー」

ホント、青子ちゃんはカワイイな。

彼女と一緒にいると、心のどこかからフンワリ優しい感情が芽生えてくるんだ。

それはなんだかすごく甘酸っぱくて、そしてちょっと胸がキュンと突かれるような、不思議な感情だった。

私は電車通学だから、駅前で青子ちゃんと別れる。

「バイバイ！また明日ね」

青子ちゃんは私がエスカレーターで上がるまで、ずっと手を振ってくれていた。

「ただいまー」

そう声をかけても、返ってくる言葉はないんだけど、ついつい口にしてしまう。

私はまっすぐ自分の部屋に行くと、窓を全開にした。

途端に風が吹き抜ける。

こんな高さだから、いつでもカーテンは開けっ放し。着替えをする時と寝てる時はさすがに閉めるけど、それ以外はほとんどカーテンは開けっ放しだった。

ベランダで風に当たる。

今日はキッド、来るかな？

今頃何してるんだろう？

普段はどんな生活をしてるんだろう？

考えるのはキッドのことばかり。

そう言えば、キッドは満月の夜に現れる・・・って前に何かで読んだことがある。

昨日は綺麗な満月だったっけ。

って事は、次の満月までキッドには会えないんだろうな。

それに、もし次の満月にキッドが現れたからってこの辺りを通るとは限らないし・・・。

でも、キッドは「また会いにきます」って言ってくれた。きつと、また会えるよね？

部屋に入ろうとした時、何かがキラツと光った。

あれ？なんだろう？

それはすごくキラキラしていて、なぜ今まで気付かなかったんだろうと思わせるほどの輝きを放っている。

私はそれを拾い上げた。

「これって・・・」

宝石だよね？

沈みかけている陽に透かすようにして見る。

「キラー・・・」

思わず口からこぼれた言葉。

こんなに大きいと、宝石と言うより逆にガラス玉に見えちゃうから不思議。

これってきつと、昨日キッドが盗み出した宝石だよね。

ビッグジュエル、って言うんだっけ。

「慌てて落として行っちゃったのかな」

そう思ったけど、昨日の彼のあの落ち着いた態度、言葉遣いを思い出して、それはなさそうだけどと思ひ直す。

そういうミスはしなさそうだったけど。

でも、わざと置いていくなんてことはないだろうし……。

それにコレ、どうしよう。

ちゃんと持ち主に返さなきゃマズイよね。

でも、誰の物だか分からないし……。

私は宝石を夕日に透かしながら考えた。

とりあえず、キッドが取りに戻ってくれば一番良いんだけど。

そうすればまた彼に会える。

もしかしたらあの白い怪盗さんは、どこで落としたのかと、今頃探してる最中かもしれない。

「やべえ……」

その頃、黒羽快斗は昨日手に入れたビッグジュエルを失くして顔色を失っていた。

「どこやったっけ？あれ」

タクシーも探した。

シルクハットも探した。

でも、どこにもない……。

どこかで落としたり？

「あれはパンドラじゃなかったから、ちゃんと返さねえと」

盗んでも目的の物でなければ持ち主に返す。

それはキッドの信条だ。

それを破ることはできない。

自分は怪盗、犯罪者ではあるけど、自分なりに誇りを持ってやってきた。

「あ……くそっ！どこで落としたかなあ」

快斗は頭をガシガシ掻きまわると、昨日通った場所を一つ一つ思い返した。

あそこのビルから盗み出して、一度屋上上がった。そこでパンドラかどうかを確認して、一度ポケットにしまった。

昨日は白馬も現場に来てたから、あんまグズグズして長くなると面倒だと思って余計なことはせずにハングライダーで逃げた。

次の日は学校もあるし、早く終わらせて早く寝よう。

そう思っていたんだけど・・・。

ここ、江古田には珍しい高層マンションの一室に目が留まって、つい降り立ってしまったんだ。

天使の寝顔。

まさにそんな言葉がピッタリだった。

開けっ放しのカーテンから、室内がよく見えた。

スヤスヤと眠っているのは、教室で顔を合わせる女の子だった。

思わずベランダに降り立って、その寝顔を見ていた。

起きる様子もなかったから、そろそろお暇しようかと思った時、彼女がベランダに出てきたのだ。

そこで2、3言葉を交わした。

教室にいる時とは違う、彼女。

もう少し話していたいと思ったけど、俺を追っていたパトカーに追いつかれちゃった。

仕方なく、彼女に別れのキス（手の甲にだけどさ）を残してその場を去った。

あの時、かな？

一番長く留まったのって、あそこくらいだし。

あの時、ベランダでもう一度ビッグジュエルを出して月に翳して確認した。

やっぱり、あの時落としたのかな。

だとしたら、早いとこ取りに行かないと。

今日は満月じゃないから、仕事も入ってない。

真夜中に、あなたの元にお邪魔します。

「綺麗だなあ・・・やっぱり」

もしかしたら、キッドが取りに戻ってくるかもしれないから、とりあえず次の満月まではこのまま手元に置いておこう。

それまでにキッドが取りに現れなかったら、白馬くん相談してみようかな。

青子ちゃん達の話では、彼は現警視總監の息子で、高校生でありながら探偵をしていると言うし。

そしてキッドとは因縁の仲らしい。

キッドの現場には必ずと言っていいほど彼の姿があると、新聞にも書いてあった。

きつとこの宝石の持ち主が誰だか分かるに違いない。

白馬くんなら、相談すればきつと事をうまく収めてくれるだろう。

そう決めて、私はお気に入りオルゴールケースの中に宝石をしまった。

ここは私の宝物ケースになっている。

初恋の男の子と海辺で拾った貝殻。

海外旅行で使わずに残った外国のコイン。

友達に誕生日にもらったネックレス。

お母さんがくれたブローチ。

初めて自分で買った腕時計。

私の忘れたくない、忘れられない思い出の品々。

それと一緒に、この宝石も・・・。

これはキッドと初めて出会った記念に。

まあ、近いうちに手元を離れてしまうけど、それでも今だけは私の思い出としてここにいてね。

「さて、なんか食べよう」

## 第四話

夜になり、辺りはしんと静まり返っている。

さあて、では探しに参りますか。

キッドはビルの屋上から辺りを見渡した。

狙いはあの高層マンション。

ハンググライダーでならひとつ飛びだ。

「ポーカーフェイスを、忘れるな」

呪文のように口の中で呟くと、ためらいもなく夜空に身を投じた。

十分後

難なく彼女の部屋の部屋のベランダに降り立つことができた。

昨日の今日で予告状を準備できなかったことが、唯一の心残りだ。

彼女を驚かすことにならないといいけど。

そつと窓から室内を覗きこむ。

今日もカーテンは全開だ。

いくら近くに高い建物がないからって、周囲から覗かれる心配がな

いからって、ちょっとばかり無防備過ぎないか？

こうやって君を覗く、オレのような奴もいるんだぜ？

心の中で夏希に話しかける。

室内は暗く、彼女がいる気配はない。

「？」

どこかに出かけてる？

こんなに夜遅く、女の子が出歩くななんて良くないぜ？

そんな事を考えていたら、室内に灯りが灯った。

「キッド？」

部屋に入ってきたのは、燭台を手にした彼女だった。

「こんばんは、夏希」

「こんばんは！キッド」

夏希の顔が一瞬にして嬉しそうな笑みで満たされる。

「来てくれたのね？」

そう言っつて、持っていた燭台を机の上に置いた。

すぐに窓辺に駆け寄っつて、ベランダに出てくる。

「今日のあなたは、一段とお美しいですね」

そう言いながら、彼女の手の甲に口づけを落とす。

いつも見ている制服姿ではない、ごくシンプルなTシャツに短パン姿。

この時間帯だから、風呂上りで寝るところだったのだろう。

彼女はパツと頬を赤らめ、おずおずと手を引き戻した。

その瞳に、思わず吸い込まれそうになって……。

気付けば、彼女との顔の間は数センチ。

ハツと気付いて身を引いた。

夏希も身動きがとれずに固まっていた。

「あ、失礼しました」

彼女の足元に膝き、自分の非礼を詫びる。

とっさにそんな行動に出たのは、頬の赤みを隠すため。

「うっん」

夏希は大きく首を振り、そして「あ、ちょっと待っててね」と言い

残すと部屋に戻った。

そしてハンカチに包まれた何かをオレに差し出す。

「これ、ベランダで拾ったの。あなたの忘れ物じゃない？」

ハンカチを広げてみれば、中からは昨日盗み出したビックジュエルが現れた。

「ああ。あなたが預かっていてくれたのですね？」

ホツとして口元が緩んだ。

「？」

そんなオレを、彼女が怪訝そうな目で見つめている。

「どうもありがとうございます」

そう一言お礼を言えば、彼女はハツとしたように慌てて笑顔を見せた。

「うん。どういたしまして。もう落とさないでね？」

オレは窓辺にあったベンチに腰を下ろし、「少しお話でもしませんか？」と誘ってみた。

「あ、うん」

彼女はまだ何か引つかかっているような表情をしていたが、オレの誘いに頷くと、隣に腰を下ろした。

「あなたの事、何かひとつでもいいから教えてくれない？」

「私の事、ですか・・・？」

思わず身構えたオレに、夏希は邪気のない笑顔を向ける。

「そうね・・・。名前とか住んでいる場所とか、そういう事も知りたいけど、それじゃああなたは困るだろうから・・・」

そう言いながらしばし考え込む。

「なんだったら答えられるかな？」

「それは中々難しい質問ですね」

苦笑混じりに答えれば、彼女は更に考え込む。

その瞳があまりにキラキラしていて、オレは視線が外せなかった。

陳腐な言い方だけど、今まで手に取ってきた、どの宝石よりも綺麗に輝く彼女の瞳。

「うーん・・・」

大真面目な顔で考えている彼女は、いつも教室で見ている彼女よりも幼い表情に見える。

「じゃあ、好きな食べ物は何？」

「えっ？」

あまりにベタな質問に、思わず素で聞き返してしまった。

「好きな食べ物、あるでしょ？」

「そうですね・・・」

好きな物、好きなモノ、好きな者・・・って違うか。

「嫌いな食べ物もありますけど、それ以外はなんでも好きですよ？」

しばし考え、ようやく口にした。

「嫌いな食べ物、あるんだ」

意外そう、という表情を浮かべている彼女。

「あなたにはありませんか？」

そう聞き返せば、クスツと笑い「ひとつだけあるの」と即答する。

「それはなんですか？」

「茗荷」

「ミヨウガ？」

「薬味で使ったりするでしょう？あの茗荷」

「ああ・・・」

茗荷が頭に浮かび、なるほどと頷くと「あなたは何が嫌いなのか」と再び聞いてくる。

「私は魚が苦手です」

「へー・・・そうなんだ。おいしいのに・・・」

そんな世間話をしていると、彼女が不意に見えないように欠伸をかみ殺した。

「そろそろお暇しましょう」

オレの言葉に、彼女の瞳が一瞬悲しそうに曇って見えた。

だが、すぐに笑顔になると「そうだね。おやすみなさい」と小さく手を振る。

オレは彼女の手を取り、恒例になったキスを落とす。

彼女がパツと顔を赤らめる。

何度されても、慣れるということがないらしい。

そんな姿がかわいくて、自然と口元が緩んでしまう。

「おやすみなさい。また会いにきます」

## 第五話

次の日。

いつも通り学校に行く。

電車に揺られ、今日は隣のおじさんの新聞を盗み読みすることもなく、ただ目を閉じていた。

昨日、キッドが浮かべた笑顔。

その笑顔を見た瞬間、ある人が脳裏に浮かんだ。

黒羽 快斗。

私のクラスメートで、青子ちゃんの幼馴染の彼。

彼が私を探しに屋上に来てくれた時に見せた笑顔と、昨日のキッドの笑顔がどうにもカブってしまつて。

と言つても、キッドはモノクルとシルクハットを着けているから、その顔ははつきりとは見えないのだけど。

口元がすごく似ているように感じた。

気のせい、だよな？

まさか、あの怪盗キッドと黒羽くんが同一人物なんてこと。

そんなこと、あるはずがない。

でも、様々な奇術で人々を翻弄し驚かせる怪盗キッドと、マジックでみんなを楽しませる黒羽くん。

なんか、似てる・・・。

今日、チャンスがあつたら黒羽くんに確かめてみよう。

「あなたの嫌いな物は何？」つて。

教室に入ると、何人かのクラスメートと挨拶を交わし席に着いた。

早速鞆の中身を引き出しに移し変える。

「おはようございます、夏希さん」

「あ、おはよう。白馬くん」

相変わらず朝から爽やかな白馬くん。

「今日は忘れ物、大丈夫ですか？」

もう恒例になっているやり取り。

「あ！」

そうだ！スツカリ忘れてた！

時間割、昨日のまんま持つてきちゃった。

「今日って、昨日の時間割と違うよね？」

恐る恐る白馬くんを確認すると、彼は黒板横の時間割を見ながら「えーっと・・・今日は生物と数学がありますね」と教えてくれた。

「はあ・・・」

やっちゃった。

昨日、キッドと別れた後、興奮してそのままベッドに入っちゃったから。

時間割のこと、スツカリ忘れてたよ。

パツと机に伏せると、白馬くんが「大丈夫ですか？」と聞いてきた。

「うん、大丈夫」

笑顔で答えたのは、頭の中で既に授業を放棄することを決めたから。「教科書なら、僕がお見せしますから」

白馬くんは優しい笑顔で「だからご安心を」と言ってくれた。

私は「ありがとう。でも大丈夫」と彼に告げると、青空の元に向かった。

屋上に上がると、今日は先客がいた。

「黒羽くん？」

声をかけるとパツと振り返る。

「おう、夏希か」

「どうしたの？サボリ？」

自分と同じ理由だろうと、扉を静かに閉めながら聞いてみた。

「いや、おまえを待ってた」

「私？」

なんだろう？

なんで黒羽くんが私を待ってたんだろう？

「さっきの白馬とのやり取り聞いて、きつとココに来るだろうって思ったからさ」

「すごい推理力だね！」

思わず感心して言ったら、黒羽くんは面白くなさそうな顔をした。

「おまえも探偵好きなの？」

「探偵って、白馬くん？」

探偵＝白馬くんのイメージが強い私は、思わずそう聞き返したけど、どうもそういう意味じゃないようで、黒羽くんは「ま、いいけど」と口ごもってしまった。

そうだ、せっかくだから今、何が嫌いか聞いてみよう。

もし黒羽くんが「魚」と答えたら、限りなく彼はキッドに近い存在というワケで……。

「ね、黒羽くん」

「なんだよ？」

「あのさ、嫌いな物」

そこまで言って、ハタと気付いた。待って待って。

私、これを聞いてどうするんだろう？

もし黒羽くんが「魚」と答えたとして、だからと言ってキッドと同一人物と決まるワケじゃない。

それに、魚嫌いの人なんてそれこそたくさんいるだろう。

笑みを浮かべた口元が、ちょっとばかり似ている感じだったからと言って、それでこうして確認して、私は何がしたいんだろう？

いきなり言葉をぶった切った私に、黒羽くんは不審そうな目を向けている。

「なんだよ？」

聞いたところでなんにもならない。

たとえば彼が怪盗キッドだったとしても、それをすんなり認めるはず

はないだろう。

そう分かった私は、質問することを止めた。

変な事を聞いて、彼とこうして気軽に話せなくなるのは嫌だった。

「ううん、なんでもない。ごめんね」

そう謝って、質問を引っ込めた。

## 第六話

白馬と夏希のやり取りを聞いていて、きつと夏希は授業をサボるだろうと検討をつけた。

生物は一限目。

数学は二限目。

続いているから尚更だ。

教科書もノートも忘れてきたなら、面倒臭くてサボるだろう。

夏希が転校してきた時から、オレはずつと気になってた。

季節外れの転校生。

長い髪をポニーテールにして、いつも穏やかな笑みを浮かべている。クラスの男子はもちろんのこと、女子もすぐに夏希の虜になった。

夏希の、あの笑顔の虜に。

特に青子は元々がおせっかいだから、あれこれと夏希の世話を焼いている。

それを横目に見ながら、オレも彼女の笑顔に心惹かれていた。

ヒトメボレ、だったのかもしれない。

でも、それ以上にオレが彼女を気にするようになった出来事がある。

それは、いつも笑っている彼女が泣いていた姿を見たことだった。

放課後の教室、みんながいなくなった教室で、夏希が誰かと電話をしながら泣いていた。

「・・・ホントに？」

そう相手に聞いている声が、今でも耳に残っている。

か細くて、不安そうな声。

いつも明るく屈託ない笑い声を立てている夏希が、こんな声で話すんだ、こんな風に涙を零すんだ、そう思ったら胸がギュツとした。

誰のための、涙なんだろう？

「せっかく会えると思ってたのに・・・」

会話の内容は気になったけど、盗み聞きはやっぱりマズイと思って

ソツと教室を後にした。

10分ほど校内をブラブラして時間をつぶし、それから再び教室に戻ったら、既に夏希はいなかった。もう帰宅したんだろう。

電話の相手、誰だったんだろう？

そればかりが気になって、気になってる自分に妙に苛立った。

それから、夏希を目で追うようになっていて自分がいた。

そんな時だ。

彼女の寝顔を見てしまったのは。

まるで天使のような寝顔だった。

安心してきつて、グツスリと眠り込んでいるその姿に、思わず手を伸ばしたいと思った。

「……くん。黒羽くん」

「へっ？」

「大丈夫？どうしたの？」

気付けば、目の前には心配そうにオレを覗き込む夏希の顔。

「あ、ああ。ごめん」

つい、意識飛んできた。

ヤバイヤバイ。

「ボーっとしてたよ？寝不足なんじゃない？」

そんな風にオレの前で笑うなよ。

無防備に、背中見せるなよ。

夏希を、後ろから思い切り抱きしめたい。

そう思ってしまった。

グツと拳を握り、その衝動をなんとか抑える。

抱きしめたい。

でも、彼女はそんなこと望んだりしていない。

「授業出ようか？」

夏希がオレを振り返り、扉に手をかけた。  
それと同時に、勢いよく扉が開いた。

「夏希さん！」

屋上に現れたのは、白馬。

「あ、白馬くん」

「探しましたよ」

ハアハアと息を切らしているところを見ると、一気に階段を上がってきたんだろう。

「ごめんね。丁度戻るところだったんだよ？」

ね？と同意を求めるように、オレの方に顔を向ける夏希。

「ああ」

短く答えると、白馬は「さ、お二人とも戻ってください。先生がお待ちです」と促した。

「教科書ならいくらでもお貸ししますから、授業をサボるのは止めて下さいね」

白馬が夏希に釘を刺している。

「それでなくても、夏希さんは生物と数学の補習を受けている身なのですから」

「はい」

チロツと舌を出し、小声で返事をする夏希。

そっとオレの方を振り返った夏希は、まるでいたはずらがバレてしまったと言つようなちよつと決まりそうな顔だった。

「怒られちゃったね」とでも言いたそうな目。

そんな何気ない仕草がとても愛しい。

多分・・・オレは白馬の後頭部を眺めながら思った。

こいつもそう思ってるんだろう。

白馬も、夏希を・・・。

こいつはフェミニニストだけど、自分から進んでこれほどまでに世話を焼くのは夏希だけ。

探偵と怪盗。

全く逆の立場なのに、女の趣味は被るのな？

口元に皮肉めいた笑みが浮かぶ。

「ね、黒羽くん？」

不意に振り向かれ、いきなり話を振られた時、オレの口元にはまだ  
苦い笑みが残っていた。

「聞いてなかった？」

夏希のキョトンとした瞳にオレが映っている。

「あ、ごめん」

「今日の黒羽くん、なんかおかしいね。やっぱり調子、悪いんじゃない？」

心配そうな顔。

白馬は不審そうにオレを見ている。

「んなことねーって。大丈夫」

安心させるようにニツと笑い、頭を軽くポンと叩く。

それだけのことなのに、オレの心臓はすごい速さで鳴っていた。

「そう？保健室、付き合うよ？」

「夏希さん！」

夏希の言葉に、白馬がメツ！と叱りつける。

まるで妹に接するようなその態度。

「あなたはちゃんと授業を受けて下さい！黒羽くんが保健室に行くなら、僕が付き添いますから」

「いないから……」。

夏希が付き添ってくれるなら、それこそ喜んで病気にもなるけど、

白馬が付き添いじゃあねえ……。

なーんもおもしろくない。

オレがブスツとしていると、白馬がわざとらしい大きな声で言った。

「さ、夏希さん。あなたは教室へ」

そしてオレに向かって、それこそ取ってつけたような笑顔でこう続ける。

「じゃあ黒羽くん、一緒に行きましょうか」

えっ、行くの？保健室に？  
白馬と二人で・・・？

## 第七話

夏希と別れると、白馬をオレを振り返り言った。

「さ、保健室、行きますか？」

口元の笑みが不敵だ。

オレはフンツと横を向いて「いかねえよ」と答えた。

「でしょうね。そう言うと思っていました」

分かってたなら聞くなよ。

つくづくコイツは性格が悪い。

「君は授業はどうしますか？」

白馬の薄ら笑いにムカついて、「サボる」と一言投げつけると、そのままオレは階段を下りて行った。

白馬と別れてやってきたのは、今は使われていない旧校舎の空き教室。

手慰みに簡単なマジックを試してみた。

よしよし、手先の感覚は鈍ってないな。

日頃からちゃんと動かしておかないと、いざという時に困ることになるからね。

オレは満足して一人頷いた。

それにしてもムカつくのは白馬のヤローだ。

あいつ、絶対に邪魔しに来た。

結局その後も授業に出る気にはなれず、オレは空き教室でマジックの練習や昼寝をして過ごした。

「夏希さん、たまには一緒に帰りませんか？」

放課後、オレが教室に鞆を取りに戻ると、白馬が夏希を誘っている

のが見えた。

白馬のヤロー・・・おまえにはお迎えのリムジンが待ってるだろうが。

そう思いながらコッソリドアの陰から二人のやり取りを盗み見る。

「でも、白馬くんはいつも車だよな？」

夏希が教科書やノートを鞆に詰めながら聞いた。

「ええ。僕の車でああなたのお宅までお送りします」

「えっ、いいの？」

夏希は素直に喜んでる。

それが白馬と一緒に帰れることが嬉しいのか、それとも車で帰れることが嬉しいのか、オレは複雑な気持ちだった。

教室を後にする二人をつける気分にもなれず、オレはしばらく誰もいない教室でボーっとしていた。

なんだって、あんなに気になるんだろ。

やっぱりあの涙のせいなのかな・・・。

白馬くんに誘われて、彼の送り迎え用の車で送ってもらえることになった。

すごくラッキー。

いつも遠目であるのリムジンを見ては、一度乗ってみたいと思っていたから。

車に乗り込むと、早速白馬くんが紅茶を入れて出してくれた。

「すごい！至れり尽くせりだね」

そう感動する私に、彼は優しく微笑む。

「夏希さんは素直な方ですね」

「そう？」

素直、なのかな？

自分では分からないけど、他人がそう言うのならそうなのかもしれない。

ありがたく、いい香りのする紅茶を頂く。

向かいに座っている白馬くんを目をやると、やはり香りを楽しむように目を閉じていた。

ずいぶんと高い茶葉を使っているに違いない。

普段はリプトンのイエローラベルを愛飲してる私だけど、この香りが普通の紅茶ではないことくらい分かる。

白馬くんがティーカップを手にしてる姿はすごく様になっていて、ホントに英国貴族が目の前にいるように錯覚してしまう。

思わず見惚れてしまった私に気付いて、白馬くんがクスツと笑った。

「冷めますよ？」

「あ、うん・・・そうだね」

慌てて一口口をつける。

「わぁー！美味しい！」

送ってもらった上に、こんな美味しい紅茶をご馳走になれるなんて、私はホントラッキーだな。

そんなことを考えていたら、白馬くんが「ところで夏希さん」と口を開いた。

「ん？なに？」

「あなたのお住まいはどちらでしょうか？」

夏希さんが初めて教室に入ってきた時、僕はすぐに気がついた。

彼女が、あの時の女の子だと。

彼女は僕を覚えてはいないようだが・・・。

たまたま彼女の席は僕の隣になり、僕が彼女の少し前に転校してきたばかりだと知ったら、彼女は僕に親近感を抱いてくれたようだった。

「同じ転校生同士、よろしくね」

そう言っただけニッコリ笑って僕に頭を下げた姿を、僕はずっと忘れないうと思う。

あの日の記憶と共に。

「あなたのような美しい方と隣同士なんて光栄です。こちらこそよろしく」

そう言っただけで彼女の手を取り、その甲にキスをした。

今まで何度となく繰り返し返してきた仕草だったけど、この時はものすごくドキドキして、

自分が自分じゃないようだった。

彼女はそんな僕の行動に、ビックリしたように目を見張り、そしてパツと真っ赤になった。

クラスメート達からは非難の声が飛んだけど、そんなのは一切無視だ。

あれから一ヶ月。

彼女の様々な面が見えてきて、僕は彼女の世話係のようになってしまった。

なんせ夏希さんと言ったら忘れ物が多いし、人の話を聞いていないこともざらだし……。

その上方向音痴だし。

意外とドジなお嬢さんだった。

これではとてもほっておけない。

しばらくの間、誰かが世話係をやらなくては学校生活に馴染めないだろう。

勉強にしても、教科によっては前の学校とではだいぶ内容が異なっているようだ。

毎日のように補習授業を受ける彼女を見て、僕も何か手助けできればと思い、たまに一緒に勉強したりもした。

僕と同じように思ったのか、中森さんも彼女の世話係のようになっている。

中森さんは優しいし、面倒見が良いから適役だ。

それに、夏希さんにしたって男の僕よりも女の子である中森さんの方が何かと頼りやすいだろう。

夏希さんに親しい女友達がいることは、僕にとっても心強い。  
彼女を見守ると決めたから。  
彼女が大変な思いをしないように。  
嫌な思いをしないように。  
困らないように。  
寂しくないように。  
だから気付いた。  
彼の視線に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8046e/>

---

あの人その後ろ姿

2010年10月22日12時05分発行